

巻 頭 言

東北地区の数学教育の論文の特質のようなことを、昨年本年報に書いた（やぶにらみの数学教育研究時評）。さらに日数教の第21回論文発表会（秋田市）でも論じた（数学教育研究法の分類の試み）。ここで提案した分類のための観点は、当該研究遂行のためにどんな装備があるかであった。第一類（大学院型）の研究とは文献が主要装備となる「数学教育の理論的研究」であり、第二類（ESM型）の研究とは児童生徒がいる教育現場のフィールドワークがある教育の実践的研究であり、最後の第三類（NCTM型）の研究とはコンピュータの装備があり、それによるデータ処理として多変量解析が利用されている研究とした。筆者は、東北地区の研究はあまりにも第三類に偏っていることを指摘し、やはりこれからの研究の進む方向は、各類の研究がバランス良く入っているのが望ましいことを示唆した。

さて東北地区の教員養成系の大学学部でも、大学院修士課程が設置されるところが増加してくるし、教育職員免許法も改正されこの4月から施行と聞いている。その中で専修免許は修士の学位が基本資格であるという。こうなると、数学教育研究の方向も大学院生の研究が大きく関係してくることは間違いがない。従って、大学院を持つ教員養成系の大学学部の教官の指導の方向が大きな問題となってくるし、大学院の学生は必ず修士論文がいるし、学会で発表することが求められるだろう。こうなると、すこし大袈裟な言い方をすれば、大学院の先生方は、今後の東北地区の数学教育の方向を決定する責任を担っているということが出来るだろう。他の地区では大学院生の研究が数学教育の“研究の面白さ”をなくし、類型的になり、自分の指導教官の目を通してだけ物事を見ることが出来ないような、「井戸の中の蛙」的発表に終始しているように見える。この状態が続くと日本の専修免許所持者の学問的な考えは、筆者のいう分類法では第一類（大学院型）に入る研究が多いという、かなり偏った状態になってしまうのではないか、早くもすでにこの偏りが現実化している、と心配するものである。

筆者は、少なくとも東北地区からは、第一類（大学院型）の研究にばかり偏らないで第二類（ESM型）や第三類（NCTM型）の研究もできる専修免許所持者が生まれることを期待して本稿を書いている。本年報もこの観点から偏りのない、多くの数学教育の論文が掲載され、全国的にみても特色ある年報と言われる年報になることを願って止まない。

世話人 佐伯 卓也
（岩手大学教授）